『源氏物語』と『維摩経』―末摘花巻・蓬生巻の読解を中心に―

（要旨）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：Ｄ１６３５８１
氏　　名：竺　銀児

本論文は、仏教的要素が論点とされる末摘花巻・蓬生巻を中心とする末摘花の物語に焦点を当て、末摘花を取り巻く「三つの友」の琴（きん）と「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る鼻、「蓬生」の常陸宮邸という三つの設定をめぐって、『維摩経』を中心とする仏典の思想と論理を用いて末摘花の物語の人物造型や構想、主題について考察を行った。その過程で白居易の琴詩及びそれに詠み込まれる『維摩経』の思想の影響が読み取れる末摘花の物語の仏教的文脈を掘り起こし、維摩詰居士の衆生済度の役割を担わされる末摘花の人物造型を浮き彫りにした。『源氏物語』と『維摩経』の関係を論じた先学の論説の流れを汲んで、仏教学的な読みの立場から末摘花の人物造型とその物語の思想性について再考することができた。

『源氏物語』には、作中人物の仏教信仰や仏教行事の場面が多く書かれている。仏教と切り離せない空間に息づく平安時代を代表する文学作品として、『源氏物語』はその研究史上、仏教との関わりが欠かせない課題の一つとなっている。経典や仏書類から『源氏物語』と仏教との関わりについて堅実な研究を積み重ねた三角洋一氏は「私の関心事の一つとして、平安時代の貴族社会の男性、女性は仏教とどの程度深くかかわっていたのかということがあって、これを出発点として、彼らの精神生活とその文化的所産の内実を探ってみようということがありました」と述べている（「『源氏物語』と仏教―経文と仏教故事と仏教語の表記―」『駒澤大学仏教文学研究』第十九号、二〇一六年二月、駒澤大学仏教文学研究所公開講演会録）。

三角氏の研究に動機づけられ、平安時代の貴族社会の男女たちの「精神生活とその文化的所産の内実」を探る氏のテーマを受け継いで、本研究は、平安時代に藤原氏が中心となって盛んに行われた維摩会で親しまれる『維摩経』との関わりの視点から、『源氏物語』に浸透する仏教思想の様相を探究し、平安時代の貴族社会における仏教信仰の内実の一面を明らかにすることを目的とする。

『源氏物語』と『維摩経』の関係については、夕霧巻における「無言太子」の譬えの出典で検討される『維摩経』の影響がまず取り上げられる。三角氏は作者が「無言太子」を知ったのは「維摩会や『維摩経』講経の折であって、みなもとは鳩摩羅什・僧肇の『註維摩経』にあるのではなかろうか。『維摩経』は読誦用経典というよりも、大乗在家仏教者のよりどころとさえなっている不思議の不二門を説く指針的な経典で、後続する天台・嘉祥・慈恩・妙楽などの注疏とともに学び講ぜられたはずである」と推測している（「源氏物語の古注釈と仏教」『源氏物語と天台浄土教』若草書房、一九九六年所収）。それを受けて、鈴木裕子氏は「貴族たちが無言太子の「無言」から容易に連想できること―それは、「維摩の無言（沈黙）」（入不二法門品）ではなかったか」と指摘している（「『源氏物語』夕霧巻の一節の再検討―「無言太子」の譬えのことなど―」『駒澤大学仏教文学研究』第九号、二〇〇六年三月）。

両氏の論で取り上げられる『維摩経』入不二法門品は、維摩詰居士が「無言」をもって二項対立の認識を越える「空」の境地に至る「不二の法門」を説示し、文殊菩薩を感嘆させた節で広く知られている。

維摩詰の「無言」については、石井公成氏「『紫式部日記』と『源氏物語』における

『維摩経』利用」（『駒澤大学仏教文学研究』第八号、二〇〇五年三月）と鈴木裕子氏「『源氏物語』末摘花巻の仏教的要素」（『駒沢大学仏教文学研究』第十二号、二〇〇九年三月）は『源氏物語』の人物造型と内容の構想における維摩詰の「無言」の影響を指摘している。

『源氏物語』の人物造型と内容の構想における『維摩経』の影響については、三角氏の「蛍巻の物語論」（前出『源氏物語と天台浄土教』所収）と「匂宮巻の薫の人物設定と『維摩経』」（『むらさき』第四〇輯、二〇〇三年十二月、『宇治十帖と仏教』若草書房、二〇一一年所収）の両論でも論じられている。

これらの先行論が『源氏物語』の内容の解釈と『維摩経』との関わりに目を向けていることに鑑みて、本研究は、仏教的要素が論じられる末摘花巻・蓬生巻を中心とする末摘花の物語に焦点を当て、末摘花の物語の人物造型や構想、主題における『維摩経』の利用に力点を置いて考察を行い、仏典に基づいて仏教学の視点から末摘花の物語の筋立てとその思想性について論を進めた。

論の中心は第二編「末摘花の物語と『維摩経』」に置かれている。第二編では、白居易の詩作に詠まれる琴（きん）の特徴及び琴（きん）と『維摩経』との関わりを確認しながら、それを琴（きん）を媒介とする恋のプロットが注目される末摘花の物語の解釈に取り入れて論を展開した。その過程において、『維摩経』の内容と仏教思想と照らし合わせながら、末摘花の人物造型と深く関わる琴（きん）、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る鼻、「蓬生」の常陸宮邸という三つの設定をめぐって、先行研究で論じられた「数珠など取り寄せたまは」ぬ末摘花の人物造型について再考を行い、末摘花の物語の構想に見る仏教的文脈と仏教思想の影響を詳論した。

第二編の論においては、末摘花の琴（きん）が論を貫く肝心なモチーフとなっている。琴（きん）というモチーフをめぐる物語の考察に因んで、第一篇を設けて『源氏物語』において「別離」の主題を担う琴（きん）の特質を論じている。主には琴（きん）がはじめて登場する若紫巻の光源氏の弾琴場面と琴曲の名が唯一明確に述べられている明石巻の光源氏の「広陵」の弾琴場面に注目して、琴（きん）をめぐる光源氏の恋物語について考察を行い、「別離」の琴曲の主題を掘り起こすことによって作中人物の「愛別離苦」の様相を捉えた。

結章においては、全論をまとめる上で『源氏物語』が完結を迎える浮舟の物語との関連性に目を向けて物語における仏道修行と心の問題の関係について検討した。最後には、今後の研究課題と研究の方向性に関連して、現代社会の問題との繋がりをも視野に入れて本研究の意義を確証した。

第二編第一章・第三章・第五章で論じた白居易詩の琴（きん）のイメージをかたどり、「無絃琴」の特質を孕む末摘花の琴（きん）、第二編第二章・第三章で論じた「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る末摘花の鼻、第二編第四章・第五章で論じた「蓬生」の常陸宮邸という末摘花像を特徴付ける三つの設定については、「心浄故衆生浄」・「心浄則佛土浄」をもって心の「浄垢」と「衆生」・「佛土」の「浄垢」を説く『維摩経』の視点から読むと、次のような結論が得られる。

光源氏側に見る美醜や好悪の区別を付ける二項対立の認識は「分別想」・「虚妄見」―「妄心」・「顛倒心」であり、「妄心」・「顛倒心」で末摘花の醜貌に拘り続ける光源氏

は「きよら」なる外形に反して、「妄想」と「顛倒」に汚れる「心垢」の衆生である。「心垢」の光源氏は末摘花の琴(きん)に宿す「空」の智慧を説く極楽浄土の「妙法音聲」が聞き取れず、「普賢菩薩の乗物とおぼゆ」る鼻の末摘花における「金色金光」の菩提の花の実相を見顕すこともできなかった。

それに対して、貧窮に迫られて荒れまさる「蓬生」の常陸宮邸を父の意志を宿した「うるはしき御住まい」として守り通しながら、一途に光源氏を待ち続ける末摘花側においては、貧に安んじる文人の孤高の生き方を象徴し、徳ある「古聲」を伝える「無絃琴」の「琴中趣」と同調する彼女の暮らしぶりと「深き蓬のもとの心」の内面が注目され、「心淨」の仏菩薩たりうる素質を呈している。

「心淨」の仏菩薩なる末摘花を見顕すには、すべての現象と存在に対して、美醜や好悪に拘る分別の念をなくし、因縁により形成され、刻々に生じては滅する現象世界の仮で「虚妄」の相に惑わされずに、「諸法空相」の実相を悟る智慧が求められる。この「空」なる実相を悟る智慧が仏菩薩の「無妄想」と「無顛倒」の「心淨」である。「心淨」の仏菩薩の智慧を体得するには仏道の修行が求められるわけであるが、第二編第五章では、末摘花の物語における琴恋と「花の顔」の恋物語の要素、そして「蓬生」の常陸宮邸という場は光源氏を惹きつけ、「無常」、「苦」、「不浄」と「空」の法を諭し、『往生要集』に見る「厭離穢土」と「欣求浄土」を説き示す「佛事」の役割を果たしていることを指摘し、末摘花の「深き蓬のもとの心」からは、衆生済度で「娑婆國土五濁惡世」に生まれる「心淨」の仏菩薩―維摩詰居士の素質が確認されることを明らかにした。

『維摩経』で説かれる心の「淨垢」と「衆生」・「佛土」の「淨垢」の問題は現代社会の人々が抱えている心の問題とも密接に繋がっている。『維摩経』の思想と論理を物語文学作品なりに表現した『源氏物語』の精神は現代人に必要とされる「心の訓練」の思想文脈として学ばれ、活用され、そして継承されていくべきであると考えられる。今後の研究の一つの大きな方向性として、現代社会が負わされている問題、課題との繋がりに立脚する『源氏物語』と仏教についての研究を模索していきたい。